様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００９９８

研究課題名（和文）近世南アジア海上交易品の調達過程における諸集団間関係の変化に関する史的研究

研究課題名（英文）A historical research on the procurement and trade of marine products from South Asia in the early modern era

研究代表者
和田　郁子（Wada, Ikuko）

岡山大学・社会文化科学学域・准教授

研究者番号：８０６００７１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：近世以降の日本で刀装の素材として高く評価された鮫皮は、主に熱帯・亜熱帯の海に生息するエイ等から採取された輸入品であった。本研究課題では、この独特の交易品である鮫皮について、オランダ東インド会社の未刊行文書をはじめとする一次史料に基づき分析した。従来、日本美術史や日蘭関係史の分野で取り上げられてきた鮫皮に対し、本研究では南アジア史およびアジア海域史の視角から迫り、とくにオランダ東インド会社の重要な鮫皮の調達地であった南アジア南部におけるその取引について、現地の政治権力者や商人層の動静や会社との関係を含めて具体的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、まず従来十分に研究されてこなかった近世の独特の交易品である鮫皮を対象とし、17－18世紀におけるその調達の経緯を具体的に明らかにしたことにある。当時鮫皮の主な市場であった日本と、その交易を担ったオランダ東インド会社にとって最も重要な鮫皮の調達地であった南アジアの双方を視野に入れ、鮫皮交易の全体像を示すとともに、一次史料に基づき南アジアにおける取引の実態に迫ったところに本研究独自の意義があると言える。

研究成果の概要（英文）：In early modern Japan there was a special demand for rayskin as standard material for sword mountings and it was highly valued among others such kinds from tropical and semi-tropical waters. Considering that it had to be imported from overseas, this research explored the trade of rayskin mainly based on the records of the Dutch East India Company, including unpublished documents. While researches of rayskin in the studies of Japanese art and history of Japanese foreign relations already exist, this research approached from the perspective of history of South Asia and the maritime Asia. It has examined the procurement and trade of this marine product in the southern region of South Asia, the most important source of rayskin for the Dutch East India Company, and investigated the roles of local rulers and merchants.

研究分野：インド洋海域史，南アジア史

キーワード：アジア海域史　インド洋海域史　南アジア史　オランダ東インド会社　コロマンデル海岸

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

特定の交易品に着目し、地域の枠組みを超えてその生産から消費までの過程を追う「モノのグローバル・ヒストリー」は、歴史学における重要な研究分野のひとつとして確立しつつあるが、従来の貿易史や経済史と重なる部分も大きいこの分野では、一般に主要な世界商品と見なされる品々の研究に重点が置かれる一方、他の交易品については軽視される傾向がある。しかし、歴史上、交易を介して異なる地域間で融通されてきた品物は多種多様である。そのような交易品のなかには、たとえ貿易の規模や世界市場への影響がそれほど大きくなかったとしても、文化史や社会史の視点から見れば、独自の重要性をもつモノが少なからず存在する。本研究では、そのような重要性を持つモノのひとつである南インド産の鮫皮に注目することによって、これまで見落とされてきた地域間の関係性を新たな視点から見直すとともに、その調達過程に迫ることによって、そこに関わる人間集団の活動や集団間の関係性を明らかにしようとするものである。

鮫皮とは、日本の伝統的な工芸用語で主に刀装などに用いられたエイをはじめとする軟骨魚類の背皮を指す。とくに近世には日本市場で需要が高かったことが知られており、南アジア・東南アジアから日本に輸入された鮫皮の国内での利用方法や加工技術については、主に日本美術史の研究によって明らかにされてきた。しかし、南アジア史や東南アジア史の分野において鮫皮が注目されることはなく、それゆえにエイ等の採取から日本に到達するまでの鮫皮の調達過程についてはほとんど分かっていない。本研究の出発点は、このような研究状況を踏まえたうえで、近世の鮫皮交易をめぐる基本的な問いへの答えを探ろうとするところにある。

２．研究の目的

鮫皮は、日本において古代より刀装の素材として知られ、今日においてもいわゆる日本刀の柄巻に用いられる標準的な素材とされている。しかし、近世以降の日本で刀装の素材としてとくに高く評価された鮫皮は、日本近海産ではなく、主に熱帯・亜熱帯の海に生息するエイ等から採取された輸入品であった。とくに朱印船貿易の発展する 16 世紀末以降になると、東南アジア諸港からの鮫皮の輸入が拡大した。1630 年代に江戸幕府によって日本人の海外渡航が禁止された後も、熱帯アジア産の鮫皮の輸入は中国船とオランダ船によって継続された。このうちオランダ東インド会社は、当時日本で「サントメ鮫皮」として知られた南インド東岸（コロマンデル海岸）産の鮫皮を、17-18 世紀を通じて日本市場に供給し続けた。

本研究は、このコロマンデル海岸産鮫皮について、その交易の実態を解明するとともに、鮫皮調達に関わった在地の生産者・商人・政治権力者、それにオランダ東インド会社などの関係性とその変化を明らかにすることを目指したものである。本研究の目的は、まず主に近世日本の文化史や美術史、あるいは日蘭関係史の立場から論じられてきた従来の鮫皮研究に対して、南アジア史の視角を導入することによって、産地から消費地までを視野に入れた鮫皮交易の全体像を示すこと、そして、日本史・日本美術史の諸研究により示されてきた鮫皮の文化的価値を踏まえたうえで、交易品としてのコロマンデル海岸産鮫皮に改めて注目し、その調達過程に関わった人々や集団、あるいは社会の諸相を明らかにすることである。

３．研究の方法

上記の問題関心と研究目的を踏まえ、本研究では、オランダ東インド会社関連文献を主要史料とし、その収集・分析を進めた。オランダ東インド会社は 17 世紀初頭からコロマンデル海岸に進出し、複数の商館を設置して継続的に交易を行っていたほか、周知のように江戸時代の日本貿易でも独自の重要な役割を果たしていた。そのため、オランダ東インド会社関連文書は当時の鮫皮の主要な産地と消費地の双方の動向を伝え得る貴重な史料であり、本研究の核となる史料群であると言える。これに関しては、初年度にオランダでの現地調査を実施し、ハーグの国立文書館（Nationaal Archief）をはじめとして、関連する資史料を所蔵する図書館・文書館における文献調査および必要なデータの収集を行った。

これらのオランダ語史料に加えて、とくに 18 世紀に関してはイギリス東インド会社関連の史料群が当時のコロマンデル海岸沿岸部社会の情況に関する情報源として重要になると考えられた。18 世紀半ば以降になるとコロマンデル海岸を含めインドにおけるオランダ東インド会社の活動は縮小していき、代わってイギリス東インド会社の勢力が増大するという変化が見られたためである。したがって、研究開始当初はこれらのイギリス東インド会社関連文書についても、海外での調査を進め、データを収集し、分析する計画であった。しかし、研究実施期間の 2 年目の末から始まった新型コロナウィルス感染症拡大の影響により、結局イギリスでの資料調査の実施については断念せざるを得なかった。さらに、感染拡大に伴い研究代表者の所属機関への入構まで制限されるような状況が長期に及んだことで、資料入手に必要な手続きが難しくなるなど情報収集全般に大きな支障が生じたうえ、入手済みの資料の利用にも困難が伴う事態が続いた。その一方で、この間、主にオランダ国立文書館における所蔵資料の電子化と Web 上での公開が進んだおかげで、本研究の最も重要な史料群であるオランダ東インド会社文書については、初年度に調査した時点ではまだ詳しい内容の確認や収集ができていなかったデータの追加調査を

進めることができるようになった。このように研究条件や環境が変化するなかで、当初計画していた研究方法を改める必要が生じた。主としてインターネットを介した電子データと国内で入手可能な文献に重点をおく方向で資史料を収集、分析することとし、需要側である日本の史料に関して交易の視点から改めて分析を加えるとともに、オランダ東インド会社の活動の隆盛期で、コロマンデル海岸に関する情報がオランダ語史料から豊富に得られる 17 世紀後半を中心に据えて、オランダ東インド会社関連の史料やデータの調査と分析に注力した。

４．研究成果

（１）研究実施期間中に行った研究報告のうち、主要なものは以下の 2 件である。まず、2019 年 1 月に資料調査のためにオランダに赴いた際にライデン大学のセミナーで行った研究報告である。このときは初年度でもあり、日本における鮫皮に関する研究状況や史料についての紹介と、この時点までの研究活動の過程で入手できていたオランダ語、英語等の資史料の分析に基づく報告が中心となったが、セミナーに参加していたオランダを拠点とする研究者との議論を通じてその後の研究推進に資する様々な情報が得られた。その後、新型コロナウィルス感染症の流行拡大により当初計画していた海外出張を断念せざるを得なかったため、このセミナーへの参加と報告は、海外の専門家と直接議論し意見交換を行うことができたという点でひじょうに有益かつ貴重な機会となった。その後、オランダ東インド会社関連文書の電子化と公開が進んだおかげで、感染症流行の影響で移動に制限がかけられていたなかでも追加調査を進め、データを収集することができた。そして、先のセミナーの折に得られた情報も参考にして集めたデータも活用し、2021 年 3 月にオンラインで開かれたセミナーで研究報告を行った。このセミナーには、歴史学に限らず多様な分野の研究者が参加していたため、報告後の議論において初年度のオランダでのセミナーとは異なる視点から多くの有益な示唆を得ることができた。

（２）本研究の主な成果としては、上述の研究報告で得られた知見も生かしつつ、最終年度に執筆した論考が挙げられる。この小論では、第一にオランダ東インド会社が扱った「サントメ鮫皮」の呼称の問題について整理し、分析の前提となる基本的な事柄を明らかにした。17-18 世紀の日本側史料には「産地」による鮫皮の分類が見られ、そのなかに「聖多黙」と呼ばれるものが含まれる。また「サントメ（の）鮫皮」という呼称はオランダ東インド会社文書でも使われており、これが「コロマンデル海岸の鮫皮」の意味で使われている呼称であることが史料上確認できる。その一方で、「サントメ鮫皮」と呼ばれたもののなかには、コロマンデル海岸に加えてスリランカの商館に集荷されたものも相当数含まれていたことが、オランダ東インド会社の船の航行や積荷に関するデータから見えてくる。つまり、「サントメ鮫皮」とは、実際にはコロマンデル海岸からスリランカに至る、南アジア南部の各地に置かれたオランダ東インド会社商館から送られた鮫皮をまとめて指す呼称であったということである。次に、オランダ東インド会社の鮫皮交易の動向について、とくにサントメ鮫皮の交易の推移を中心に数量データも示しつつ分析を行った。その結果、オランダ東インド会社の鮫皮交易は東南アジアから始められたこと、その一方で早い段階からコロマンデル海岸で集荷した鮫皮も送られており、17 世紀半ばにはオランダ東インド会社がサントメ鮫皮への依存度を高めつつあったことが明らかとなった。また、とりわけ 18 世紀については、確認可能なデータから分かる限り、バタフィア経由でオランダ東インド会社が日本に送った鮫皮のほぼすべてがサントメ鮫皮であったことを示した。さらに、出島の商館長からコロマンデル海岸の商館に対してたびたび注文や要請があったことについても、史料に基づき具体的に明らかにした。そのうえで、続いてこの論考では、南アジアにおける鮫皮の調達と取引について、一次史料に基づき以下の諸点を明らかにした。そのひとつは、オランダ東インド会社が現地の政治権力者や商人との間で合意や契約を結び、鮫皮の独占的な買い付けを目指すようになったことである。しかし、このような取り決めには現地の権力者や商人の利害と衝突する側面があり、現地の政治情勢や社会状況が変化するなかで実効性が失われてしまったり、一旦は合意に至った条項について後に見直しが行われたりすることがあった。オランダ東インド会社は複数の地域において、その近辺で入手可能な鮫皮を独占的に買い入れようと試みたが、日本市場の需要を満たすだけの数を確保するのは容易なことではなかった。さらに、オランダ東インド会社では、鮫皮の調達に際し、ある時期以降、南アジアで入手するべき皮の大きさを重視する動きが見られたことに注目した。そして、このサイズの問題に関する分析検討を通して、オランダ東インド会社の南アジアの諸商館、バタフィアの東インド総督府、そして在地の多様な商人層のそれぞれの思惑が交錯するなかで、市場である日本の事情も加わって地域を跨いで様々な駆け引きが見られたことを明らかにした。

以上のように、本研究では、従来十分に研究されてこなかった独特の交易品である鮫皮を対象とし、オランダ東インド会社の未刊行文書をはじめとする一次史料に基づいて、その調達の実態の一端を解明することができた。オランダ東インド会社にとっての鮫皮の主要な調達地である南アジアと、最重要市場である日本の双方を視野に入れた歴史学的研究は未だほとんど行われていない現状に鑑み、独自性の高い研究成果であると言える。今後は、まず現在準備中のもう 1 本の論文を可及的速やかに完成させることを目指したい。また、研究のさらなる発展のためには、本研究課題実施期間中に確認することができなかったイギリス東インド会社関連の史料群について調査を進める必要がある。それらのデータも併せて活用することにより、南アジアにおける鮫皮調達の実態をより具体的に明らかにすることができるだろうと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 和田　郁子
２．発表標題 インド産鮫皮と近世日本―文化的観点から見た遠隔地交易
３．学会等名 第192回白眉セミナー
４．発表年 2021年

１．発表者名 和田郁子
２．発表標題 近世コロマンデル海岸の港町 ―海上交易と内陸社会―
３．学会等名 第20回洛北史学会大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Ikuko WADA
２．発表標題 Ray skins and Japanese swords: reception of imported material before the emergence of a symbol of national aesthetics
３．学会等名 Cultural Mobilization: Cultural Consciousness-raising and National Movements in Europe and the World（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Ikuko WADA
２．発表標題 Tropical ray skins for the swords in early modern Japan
３．学会等名 COGLOSS seminar, Leiden University
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

1．著者名 吉澤誠一郎監修，石川博樹，太田淳，太田信宏，小笠原弘幸，宮宅潔，四日市康博編	4．発行年 2022年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 378
3．書名 論点・東洋史学：アジア・アフリカへの問い158	

1．著者名 荒川 正晴、大黒 俊二、小川 幸司、木畑 洋一、冨谷 至、中野 聡、永原 陽子、林 佳世子、弘末 雅士、安村 直己、吉澤 誠一郎	4．発行年 2022年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 310
3．書名 南アジアと東南アジア ～15世紀	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関